ウトウ

　当協会の自主企画旅行で天売島にウトウの帰巣を見にゆきました。聞きしに勝る光景でした。天売島のコロニーは 30～40 万羽が営巣繁殖するようですが、日暮れ間もなく一斉に帰巣してきます。早いテンポの羽ばたきで、風をきる飛翔音とともに鳥影が次から次に低空で視界をよぎります。この時期人丈よりも高く伸び密生したオオイタドリの藪に突入し、バサバサと音をさせて着地します。そこいらじゅうでその音がします。着地して自分の巣を探すのにうろつきます。イタドリの藪の中は暗闇です。ヒナに与える小魚を嘴いっぱいに加えてくることが知られていますが、この時期巣立ち間近なこともあって、咥えてもどった親鳥は確認できませんでした。潜水しての漁をするわけですから海中では深さに比例して暗さが増します。そんな中で嘴いっぱいのイカナゴやカタクチイワシを咥えこむわけです。夜目が利くにちがいありません。一度で全部を咥えるわけがないので、一匹一匹水中でどうして咥えることができるのかこれも不思議です。大海原にいて、今自分がどこに位置しているのかを正確に認識しているからこそ、時間どおりに自分の巣に帰ってこられるわけです。いろいろな面で驚異的な能力であります。チドリ目ウミスズメ科、体長 38cm、漢字表記「善知鳥」。オオセグロカモメにヒナへの餌を略奪される光景もテレビ等で有名ですが、オオイタドリが剥ぎ取られたほんの一部分の現象であることもよくわかりました。

　羽幌からのフェリーの甲板に上がって見渡しますと、海面すれすれに列状に群れ飛ぶ水鳥たちがあちらこちらと目につきます。大型のウミウは積丹でおなじみなので、すぐ識別できますが、中型のウトウ、さらに小型のウミスズメがいるようでした。体形と羽ばたきかたがツバメを思わせるウミツバメも単独的に時々目にはいります。焼尻島に接近するにつれてカモメ類を含めて海鳥たちの密度が濃くなってきます。鳥たちの数の多さからもこの海域の豊饒さがよくわかります。

　天売島の案内図にノゴマの丘とかベニマシコの原野、クロツグミの森、シロハラの森等々まだお目にかかっていない鳥を含めて陸鳥たちも豊富であることがうかがわれますが、今回は陸鳥まで目がまわりませんでした。

　天売島と焼尻島との水源涵養林の機能の比較をビデオと棟方さんの解説で理解しましたが、森林の大切さを再認識し、わがボランティアの存在意義も確認できる旅でした。